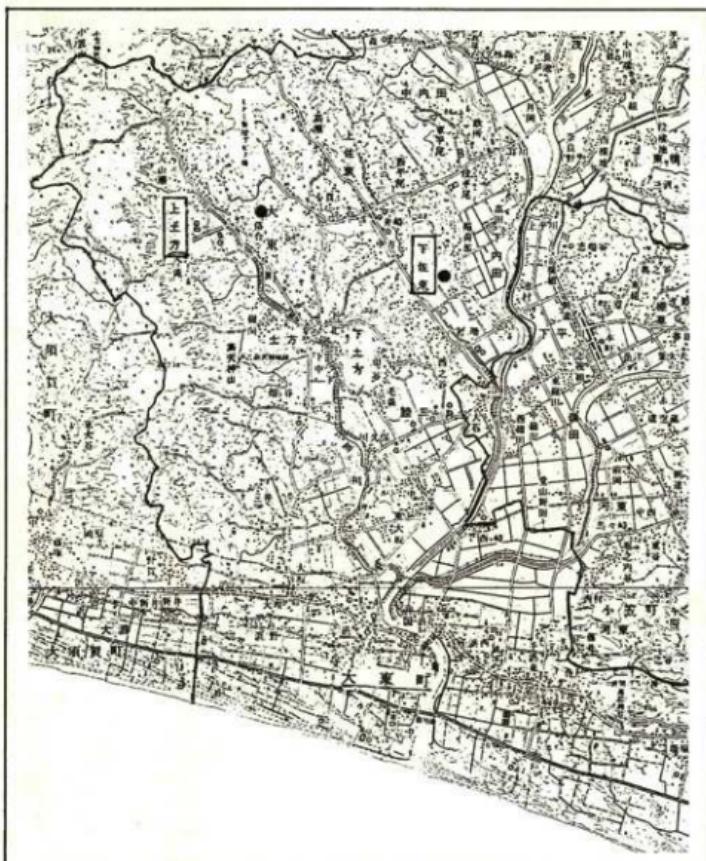


埋蔵文化財調査報告書

— 下佐東地区・上土方地区 —



1988
大東町教育委員会

例　　言

1. 本書は大東町下佐東地区及び上土方地区の埋蔵文化財確認調査の報告書である。
2. 調査は大東町教育委員会が主体者となり、松下 仁（社会教育課）が担当し、五島康司（県教委文化課）が調査を担当した。
3. 下佐東地区は県営の農地開発事業に伴う確認調査であり、上土方地区は県営農道整備事業に伴う確認調査である。いずれも国及び県の補助金を得て実施した。
4. 調査にあたっては、佐東南地区土地改良事務所の方々および、上土方地区的地元の方々の協力、援助を得た。
5. 調査の整理、本書の編集、執筆は五島がおこなった。
6. 調査体制

大東町教育委員会

教育長	青野 行雄
社会教育課長	川口 功
課長補佐	深川 昂
主事	松下 仁

静岡県教育委員会文化課

五島 康司

目　　次

下佐東地区確認調査

1. 確認調査に至る経過	1
2. 確認調査の経過	1
3. 確認調査の結果	2
4. 大東町の横穴について	6
5. まとめにかえて	6

上土方地区確認調査

1. 確認調査に至る経過	7
2. 現地踏査の結果	7
3. 確認調査の経過と結果	8
4. 宇峰城について	9
5. 高天神城について	9
第1図 山田工区確認調査地点	8
第2図 大東町横穴群分布図	9
第3図 宇峰城確認調査地点	9
第4図 宇峰城	9
第5図 高天神城関連城館分布図	11

下佐東地区確認調査

1. 確認調査に至る経過

下佐東地区的農地開発事業の対象区は山田工区と呼ばれているが、この山田工区の造成工事が昭和62年度に予定されていたため、埋蔵文化財の調査が急務となり、61年度より大東町教育委員会から県教委文化課に調査についての相談があった。

山田工区内にはすでに城山横穴群2基の存在が知られていたが、工区の南端に隣接するところにはハツ谷横穴群13基の存在も確認されていた。このことから、他の横穴や古墳その他の遺跡の存在も考えられ、山田工区全域の踏査を実施し必要に応じて確認調査を行うこととなった。

ハツ谷横穴群は昭和57年の調査で13基が確認されている。(1983年 遠江の横穴群 岩滑ハツ谷横穴群 県教委) 大きく開口している1号～7号横穴の群と一部が開口している8号～13号横穴の群があり、8号～13号横穴の間には未確認の横穴の存在が予想されると報告されている。1号横穴は屋根の先端部山裾の谷の入口部に位置し、順に北に入り込む谷の斜面に列をつくり、奥に入るほど標高が高くなっている。その範囲は南北方向に約100m程であり、1号～13号横穴との標高差は12m～15mになる。いずれも、地山である粘板岩質の岩盤を掘って造られている。

ハツ谷横穴群の保護と環境保全を図るよう造成計画を作成するよう依頼したが、ハツ谷横穴群の存在する屋根の北西斜面を削る計画になった。横穴への影響が心配されることから、農林事務所にさらに設計の再検討を依頼するとともに、13号横穴より北側から山頂部までの斜面の確認調査を実施することになった。

城山横穴群についても保存するよう協議したが、横穴の存在する丘陵だけを造成計画からはすすことは全体設計の上でできないとの結論に至ったため発掘調査を実施することになった。

2. 確認調査の経過

山田工区は南北に細長い丘陵の西側小丘陵から成る弓なりの工区であり、面積は約7万m²程ある。横穴及び古墳や他の埋蔵文化財の存在が予想される場所についてまず踏査を実施した。丘陵の多くは雑木が生い茂り踏査を困難なものとしたが、横穴の存在が予想される丘陵の東や南の斜面については急斜面を除いてすべて踏査するようにした。

調査方法としては、未開口の横穴の存在も考えてできるだけボーリング棒で確認し、さらに必要と思われるところは山肌を削って岩盤を露出させて調査した。

踏査の結果から山田工区内で横穴の確認調査を必要とする次の6地点(第1図)を設定した。

A 地点	宮ヶ谷北 (南斜面)	D 地点	清水ヶ谷北 (南・南西斜面)
B 地点	松ヶ谷 (東斜面)	E 地点	清水ヶ谷 (南斜面)
C 地点	堂ノ谷 (南・南東斜面)	F 地点	ハツ谷 (東斜面)

E地点の清水ヶ谷は城山横穴群の存在するところであるが、この谷の名称が清水ヶ谷であることから「城山横穴群」の名称を「清水ヶ谷横穴群」に変更することにした。

踏査では遺物の散布及び古墳等は確認することはできなかったが、遺跡の存在が予想される山尾根上及び、丘陵の平坦部について試掘を実施することにし、G～Kの5地点（第1図）を設定した。

3. 確認調査の結果

B地点の松ヶ谷で1基の横穴を（開口）、D地点の清水ヶ谷で4基の横穴が（未開口1基、開口3基）確認されたが、他のA・C・E・F地点では横穴は確認できなかつた。

山尾根及び平坦部での確認調査は $2\text{m} \times 2\text{m}$ グリッド及びトレントを設定して試掘を実施したが、遺物・遺構はG～Kの5地点とも検出することはできなかつた。

B地点松ヶ谷——地元の人から穴のあいている所があったとの話を聞き、丘陵の斜面をくまなく踏査した結果、山頂下の東斜面に一部開口（幅80cm、たて20cm）した横穴1基の存在を確認することができた。

この横穴の東西方向の山肌を10m程削って調査したが他の横穴は存在していなかつた。横穴の存在する下の斜面は急で危険なため調



確認調査作業風景



松ヶ谷 1号横穴



清水ヶ谷 遠景

査できなかったが、造成工事の際に重機等の力を借りて調査することになった。

E地点清水ヶ谷——城山横穴群として2基の横穴（1号・2号横穴）が開口して存在していたため、その附近を草刈して、西側は丘陵先端部までと東側20mの範囲について山肌を削り岩盤を出して調査した。その結果、2号横穴の東側で横穴の墓道部と考えられるV字状断面が検出された。暗褐色土層が安定して堆積していることから未開口の横穴であることが予想された。（3号横穴）これらの横穴群の下斜面についても確認調査を実施したが、横穴は認められなかつた。

この附近の丘陵には幅1.5m～2.5m程の帯状の段々畑が頂上近くまでいく重にも巡っているが、清水ヶ谷においても段々畑が巡っていた。清水ヶ谷1号・2号横穴もこの後世の開墾によりカットされていた。1号横穴は主体部奥壁部分をのこし、主体部天井部はなくなっていたが主体部本体は埋った状態であり、幅1.6m、高さ20cm程開口していた。2号横穴は1号横穴の2.4m東側に位置していた。玄門部をカットされ、墓前城も開墾の影響を受けていると思われた。幅0.7m、高さ0.8m程開口していた。主体部には10cm程土が積っていた。3号横穴は2号横穴の東約4mに位置し、墓道部と



清水ヶ谷 1号横穴



清水ヶ谷 2号横穴



清水ヶ谷 3号横穴

考えられる幅1.5m、高さ1.8mのV字状の断面が検出された。1号～3号横穴は順に標高が高くなっていた。

F地点ハッ谷——丘陵の山頂附近は工事計画によると北西側が急傾斜にカットされるため横穴への影響が心配された。特に13号横穴より東へ山頂にかけて十分な踏査をするとともに、二ヶ所の山肌を削る確認調査を実施したが横穴は確認できなかった。

以上のように、清水ヶ谷で3基、松ヶ谷で1基の合計4基の横穴が確認された。これらの横穴について7月下旬から8月にかけて渡辺康弘氏(早稲田大学職員)を調査主任として町教育委員会で本調査が実施された。(1988・大東町岩滑横穴群発掘調査報告書 大東町教委)

4 大東町の横穴について

牧野原台地と小笠丘陵より流れ出る菊川は、小笠町・菊川町・大東町から支流を集めて遠州灘へ注いでいる。この菊川流域に広がる平野に水田をつくり経済的基盤を得て古代より多くの人々がこの東遠地域に住んできた。

古墳時代の横穴群は3町で126群481基を数え、特に菊川の中流域に集中している。それらの横穴の多くは支流の丘陵上に形成されている。(第2図)



第1図 山田工区
確認調査地点



1 天鳥山	2 王見田	3 宮清八穴山	4 谷谷	5 谷谷	6 水口	7 駅	8 基	9 玉興山	10 火貓	11 山一の森	12 森山	13 田	14 毛毛森	15 森山	16 森山欠下峰	17 森山	18 毛毛田	19 森山	20 高	21 本	22 冲	23 勝	24 前
1 天鳥山	2 王見田	3 宮清八穴山	4 谷谷	5 谷谷	6 水口	7 駅	8 基	9 玉興山	10 火貓	11 山一の森	12 森山	13 田	14 毛毛森	15 森山	16 森山欠下峰	17 森山	18 毛毛田	19 森山	20 高	21 本	22 冲	23 勝	24 前
1 天鳥山	2 王見田	3 宮清八穴山	4 谷谷	5 谷谷	6 水口	7 駅	8 基	9 玉興山	10 火貓	11 山一の森	12 森山	13 田	14 毛毛森	15 森山	16 森山欠下峰	17 森山	18 毛毛田	19 森山	20 高	21 本	22 冲	23 勝	24 前
1 天鳥山	2 王見田	3 宮清八穴山	4 谷谷	5 谷谷	6 水口	7 駅	8 基	9 玉興山	10 火貓	11 山一の森	12 森山	13 田	14 毛毛森	15 森山	16 森山欠下峰	17 森山	18 毛毛田	19 森山	20 高	21 本	22 冲	23 勝	24 前

第2図 大東町横穴群分布図



清水ヶ谷 遠景

佐東川は北西より菊川に流れ込む支流であるが、この佐東川にも多くの横穴が存在する。北方より天王谷横穴群・鳥見ヶ谷横穴群・山田ヶ谷横穴群・宮ヶ谷横穴群・清水ヶ谷横穴群・八ツ谷横穴群と続き、佐東川が菊川へ流れ込む下小笠川とはさまれた丘陵の先端部には78基を数える大規模な毛森山横穴群がある。

大東町全体では19群 148 基の横穴が確認されているが、そのうちすでに消滅が確認された横穴は86基であり、全体の58%にもなっている。町内には未確認の横穴もまだ多くあると考えられるが、今後も開発と横穴の保存との調整に期待したい。

5. まとめにかえて

確認調査では、草深い中や雜木林の間を共に登り下りして、精力的に作業をして下さった佐東地区の方々、そして、雨の中も共に調査に走り回って下さった社会教育課の川口課長、深川補佐、担当の松下氏、山の中まで激励に来て下さった青野教育長に感謝の意を表したいと思います。

下佐東地区はすでに造成が進み、本調査・記録調査の終了したこれらの横穴の姿は今はもうありません。これらの横穴を築いた古代の人々や丘陵ごとにいく重にも巡らせてあった段々畑を築き、耕作していた先人達の労苦を偲びたいと思います。

上土方地区確認調査

1. 確認調査に至る経過

昭和61年に上土方地区に農免農道整備事業として道路計画がなされ、その造成工事が昭和63年以降に実施されることになった。計画路線内に中世城館として知られている宇峰城（1981年 静岡県の中世城館跡 県教委）の一部が入ると思われ、大東町教育委員会から県教文化課に遺跡の取り扱いについて相談があった。

計画された道路幅は7mであるが、宇峰城附近では丘陵部を通るために法面が大きく必要となり、造成幅は場所によっては70m程にもなることがわかった。そのため造成範囲に宇峰城がどの程度かかるか現地踏査を実施することにした。

2. 現地踏査の結果(第3図)

現地踏査は道路造成に宇峰城がどれだけかかるかを調査するとともに、宇峰城の城館又は砦としての現況を調査する目的で進められた。以下はその結果である。

A地点 西側平坦部は、宇峰坂に弓を射た場所といわれるところであるが、幅30m程の平坦部がゆるやかに傾斜している。



F地点 遠景



F地点 確認調査



G地点 完成状況

土壌状の遺構等は確認することはできなかった。

B地点 北尾根では10m²程の平坦部が二段になっているが、土壌状の遺構等はみられなかつた。

C地点 東尾根は、急斜面で、平坦部は見られず、掘り切り等の遺構もなかつた。

D地点 丘陵が幅15mにわたり削られているため、尾根上からは掘り切り遺構に見えたが、南西側の畑を開墾した際に尾根を削り切ったものであり、尾根の一部がなだらかに残っていることからも、掘り切り遺構でないことがわかつた。

E地点 頂上附近から南へのびる丘陵はやせ尾根であり、幅1m~2mとせまく、平坦部は存在していなかつた。

中世城館又は砦等では地表面に見られる遺構としては、土壌や掘り切り、空掘り等が考えられるが、宇峰城といわれる範囲についての踏査ではそれらを認めることはできなかつた。北尾根附近に平坦部がいくらか存在するが、西側丘陵及び南東側丘陵へ続く尾根は切られていないなど、砦としての機能についても再検討する必要があると考えられた。

農業道路にかかる部分としては南西部（F地点）にゆるやかな傾斜を持つ平坦部と、頂上から南へのびる尾根の先端部（G地点）については、さらに確認調査を実施することにした。



第3図 宇峰城確認調査地点

3. 確認調査の経過と結果

F地点・G地点ともトレンチを設定して確認調査をした。

F地点 宇崎城といわれる範囲の南西方向の丘陵先端部になる、幅20m南北方向30m程のゆるやかな平坦部である。ほぼ東西方向に幅1m×25m、南北方向に1m×5mのトレンチを設定して調査したが、遺物・遺構とも確認できなかった。

G地点 丘陵先端部の尾根上に1m×10mのトレンチを設定し調査したが、遺物・遺構とも確認できなかった。

以上の結果から、宇崎城といわれる範囲の南側に接する農業道路の造成工事を実施することは、埋蔵文化財のうえからは問題ないと考えられた。宇崎城については「城」又は「砦」としての積極的な状況は確認できなかった。今後さらに何らかの調査が実施されることを望みたい。

4. 宇崎城について

宇崎城については「1981年 静岡県の中世城館跡 県教委」に記載されているが、古文書及び他の文献に記載例はない。参考までに宇崎城の部分を掲載する。(第4図)



第4図 宇崎城(静岡県の中世城館跡より)

1 高天神城	10 宇峰城	19 星川砦
2 小笠山砦	11 毛森山城	20 煙ヶ谷砦
3 能ヶ坂砦	12 安威砦	21 中河原砦
4 火ヶ峰砦	13 惣勢山砦	22 笠田砦
5 獅子ヶ鼻	14 田ヶ谷砦	23 帝釈山砦
6 中村城山	15 西ノ谷砦	24 神宮寺砦
7 三井山砦	16 萩原口砦	25 芳峰砦
8 日向砦	17 矢本山砦	
9 風吹砦	18 林ノ谷砦	

高天神城周辺城館

5. 高天神城について

戦国時代、今川氏親は遠江を支配していくが、高天神城は今川氏親の家臣福島正成の築城によるものと考えられている。福島氏は「土方城」を築いているが、この城が今川氏の支城である高天神城と考えられる。その後、高天神城は小笠原氏に預けられていたが、今川氏の衰退で今川氏真の力がよろんでいた遠江も徳川家康の力に押されてきた。高天神城を守っていた小笠原与八郎長忠は、今川方から徳川方につき、高天城は徳川氏の勢力範囲となったのである。

一方、武田方は遠江に勢力を伸ばすべく、武田信玄は元亀2年（1571年）には高天神城の近くまで押しよせるまでになった。信玄が没したのち勝頼は高天神城を攻略するために牧野原台地に敵討原城を築き、天正2年（1574年）5月に2万の大軍で小笠原長忠ら2千が守る高天神城を攻めた。家康は自らは高天神城に援軍を出さず、家康の要請を受けた信長が岐阜城を出陣したのは6月18日になっていた。勝頼は信長の援軍が来ることを知ると高天神城を一気に攻め落そうと攻撃をかけ、6月28日に西の丸が陥落し、城内は勝頼方につく東退組、家康方につく西退組とに分かれ対立したが、7月9日には開城となった。

武田勝頼はその後横田基五郎尹松を城将としたが、天正3年（1575年）5月に長條の戦いで徳川と織田の連合軍に大敗した。高天神城は武田氏にとっての遠江支配の最後の拠点となっていく。

家康は高天神城攻略のため浅羽の馬伏塚城に西退組の大須賀康高を迎え、天正6年（1578年）3月に康高に横須賀城を築城させている。さらに、高天神城をとり囲むように天正7年から8年にかけて後に6砦と呼ばれる三井山砦・小笠山砦・中村砦・火ヶ峰砦・能ヶ坂砦・獅子ヶ鼻砦を築いている。（第5図）

高天神城は岡部丹波守真幸を城主としていたが、家康の包囲網の中で、武田氏からの援軍もないまま籠城戦を覚悟したが、長期戦となり、ついに天正9年（1581年）3月22日に城兵900は城から討つて出る。ここに武田方は大敗し、高天神城は落城し、その後廢城となった。

高天神城にかかる城館・砦は文献上からその存在が明確なものもあるが、伝承などからそ

の存在が推定されたものも多い。宇峰城・毛森山城等「城」の名称が付けられているが、「砦」として考えるべきものもある。いずれにせよ高天神城の国指定史跡としての整備が進められる中で、これらの関連城館についても調査検討されることを望みたい。



第5図 高天神城関連城館分布図

埋蔵文化財調査報告書

—下佐東地区・上土方地区—

1988年3月31日

編集 大東町教育委員会

印刷 株式会社 三創

